シンポジウムの開催にあたって

下原康子
千葉県がんセンター患者図書室

今回のシンポジウムは一般公開といたしました。これは本大会初の試みです。また、医療者、患者、図書館員（医患図）が同じ壇上で討論するのもおそらく初めてではないでしょうか。その意味で画期的なシンポジウムが期待されます。

テーマは「図書館への期待　患者・家族が病気と治療について学ぶために」です。キーワードは医学情報です。ところで、この医学情報ということばですが、どうやらそのイメージは医患図の三者で多少異なっていたりズレていたり重点の置きかたが違っていたりするようです。

たとえば、患者･家族の場合、病気になったとたんに、それまでさほど関心のなかった医学情報が重要な情報に一変します。真っ先に欲しいのはいい病院・いい医師の情報でしょう。それから、治療法や治療成績など詳しい情報が求められるようになります。最初の情報は医療者から与えられる説明ですが、それが十分でない場合は書店や公共図書館の医学コーナーに足を運んだり、インターネットや患者会にアクセスしたりするでしょう。

一方、医療者と医療系図書館員、とりわけ後者にとって医学情報といえば学術情報です。医学専門書、医学専門雑誌、EBM 文献、学会情報、それらを検索するための文献検索データベースなどです。これらの情報は主として医療関係者に提供されており、多くの患者・家族はその存在さえ知りません。けれども、医療系図書館員の多くは自分や家族のためにこれらの情報を利用したことがあり、その有効性をよく知っていると思われます。

看護師においては、患者から医学情報を求められたとき、その内容に加えてそれをどのようなタイミングでいかに伝えるかに力点がおかれます。これは患者図書館の担当者にも同様に求められる技術かもしれません。

シンポジウムではそれぞれの立場から自由に発言・討論していただきたいと思います。その中では意見のすれ違いがあるかもしれません。しかし、そこからかえって問題点が見えてくることもあります。まずはお互いの医学情報の取り方・扱い方・提供の仕方の違いを知り、視野を広げ理解しあうこと、それがシンポジウムの第一のねらいであると考えています。その上で、各種図書館の担うべき役割やどのような協力や連携が必要になるのか、などの具体的な課題が見えてくることを期待しています。なにはともあれ、初めての出会いに胸をときめかしています。